

【暗証聖句】

「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。」ヨハネ 5 章 39 節

【日・金持ちとラザロ】

ルカ 16 章 22、23 節 「やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。そして、金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると、宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが、はるかかなたに見えた。」

死後の状態について、聖書からすべてを知りつくすことはできませんが、死んだらすぐに天国（あるいは地獄）に行くかのように言っている箇所がいくつかあります。このような一見矛盾するかのような聖句について、今週は学びます。いずれも難解な聖句であり、私たちには隠されている部分もありますので、その点をおさえながら見ていく必要があります。

まず最初に、死後の世界である黄泉（ギリシャ語・ハデス）について教えていると勘違いしてしまうことが多いのが、ルカ 16 章 19～31 にかけて書かれている、金持ちとラザロのたとえ話です。このたとえ話の特徴は、死後の世界が描かれていることで、ラザロは死んですぐにアブラハムのいる場所に行き、金持ちは苦しい陰府に下っています。これを文字通りに理解する人もいますが、そうすると人は死ねばすぐにこのような死後の世界に行くこととなります。そして、そこでは意識がちゃんとあり、救われなかった者が行く世界から救われた者が行く世界が見え、アブラハムと金持ちが会話さえしています。これが事実だとすれば、これまで学んできた他の箇所の教えとは異なり、矛盾してしまいます。他の箇所で教えられている死後の状態とは、人が死ねば意識がなくなり、イエス様の再臨まで眠ったような状態であることです。このことから、このラザロと金持ちのたとえ話は、あくまでも当時の人々が考えていた死後の状態を用いて、生きている間にみ言葉に耳を傾け、正しい生き方をしなければならぬことを教えているのであって、死後の世界について述べているのではないということです。

【月・あなたは今日私と一緒に樂園にいる】

ルカ 23 章 43 節 「するとイエスは、「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われた。」

イエス様と一緒に十字架に付けられた犯罪人の一人に対し、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と言われました。このことから死んだらすぐイエス様のおられる天国に入ると信じている人も多いようです。この言葉は、死の直前に、イエス様を救い主として信じた犯罪人に対する、イエス様の慰めと希望に満ちた言葉であり、それ以上の意味を無理やり付け加えるべきではありません。

この聖句で問題になるのは、「今日」という言葉です。もし、今日イエス様と犯罪人が天国にいるとするなら、逆に大きな矛盾が生じます。というのは、イエス様が昇天されたのは今日ではなく、復活した三日後です。また、確かにイエス様はその日、十字架で死んで行かれましたが、犯罪人はしばらく生き続けたかもしれません。屈強な人だと 1 週間近く十字架で生き続けたと言われています。さらに、文法的に「今日」と言う言葉は、「言うておく」にかかっているようにも訳すことができるのです。ルカは全部で 20 回、「今日（セーメロン）」という言葉を使っていますが、そのうち 14 回までが先行する動詞にかけており、ルカはそのような使い方をする傾向がみとれるそうです。つまり、ここでは「今日樂園にいる」ではなく、先行する動詞の「言うておく」にかかって、「今日言うていく」と訳す方が正しいということです。

更に付け加えるなら、「樂園」と言っているのであって、「天国」とは言っていないこともポイントです。そうであれば、今日という表現はとても大きな慰めになってきます。イエス様と共に「いつか」ではなく、「今日」と言っておられることになるからです。インマニエル、神はいつも信じる者と共におられるということです。

【火・この世を去ってキリストと共に】

パウロは、フィリピ 1 章 23 節で「この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたい」と熱望しており、この方がはるかに望ましい」と言っています。この言葉だけを見ると、死んですぐにキリストのおられる天国に行くかのように読めます。しかし、テサロニケー 4 章 16、17 節では、「合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります」と、死んですぐに天国ではなく、キリストが再臨されるときに復活すると書かれてあります。では、なぜパウロは「この世を去って、キリストと共にいたい」と熱望しているのでしょうか。パウロの言葉を少し前から見てみると、パウロのこのときの気持ちが分かってきます。

フィリピ 1 章 21、22 節「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども、肉において生き続けなければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません」

パウロが一番望んでいたこと、それはキリストと一つとなることでした。「生きることはキリストであり」と言うほど、キリストしか見えないような境地に生きていました。獄につながれ、身動きのできないような状況の中で、いつ力尽きて死ぬかもわからない、いつ殉教してもおかしくない状況の中で、ますますパウロの目はキリストにだけ注がれていったことでしょう。この世の苦しみや束縛から解放されて、キリストのもとにいたい、パウロの望みはただそれだけだったのです。実際には、死があり、眠りがあり、再臨があり、そして復活という順序なのですが、そのような時差を飛ばして、パウロが一番望んでいることを、ここで素直に述べているのです。しかし、この様に述べた後に、自分の望みよりも信徒を励ますことを優先すると続けるのです。

フィリピ 1 章 24 節「だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です」

ここがパウロのすごいところです。神様がこの世においてなすべき働きがあるとされるならそれを優先するということです。

【水・捕らわれていた霊たちへの宣教】

ペトロの手紙一 3 章 18～20 節「キリストは、肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです。そして、霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところへ行って宣教されました。この霊たちは、ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です。」

この箇所は宗派を問わず、難解な聖句として知られているものの一つです。捕らわれていた霊たちとは誰のことか。キリストは十字架に付けられて死に復活するまでの 3 日間の間に、宣教されたということなのか。死んだあとにもう一度福音を聞くチャンスがあるのかなど、次から次へと疑問が出てきます。

まず、捕らわれていた霊たちと言う言葉ですが、それはノアの時代に従わなかった者たちのことだと書かれてあります。聖書の中で、霊というギリシャ語「プネウマ」が、死者に対して使われることはありません。このことからノアの時代、実はこの受肉前のキリストが霊において、ノアを通して働き、人々に宣教していたのではないかとする解釈があります。しかし、忍耐して宣教しつづけたけれども、ノアの家族以外従わなかったというわけです。獄に捕らえられているというのは、罪の奴隷状態にあったという意味にとります。

また、「宣教した」と言う言葉に関してですが、ギリシャ語の「ケルツ」という言葉が使われており、「宣言する」という意味があります。通常、福音が語られるという意味で使われている言葉は「ユアンゲリゾ」で、ここでは使われていません。そのことから、イエス・キリストは福音を語ったのではなく、「キリストによる罪の赦しと勝利が完成されたこと」を、悪の霊たちに「宣言」したのだとする解釈もあります。

ただ、文脈から言えば、ペトロの手紙一 3 章 17 節の「神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい」という流れの中で語られています。そのことから、キリストも十字架という苦しみを通られ、さらにノアの時代には、一人でも多くの魂を救おうと、「善を行って苦し」まれたのだというのが中心であり、死者の状態を注解しているわけではないという点も抑える必要があるでしょう。

【木・祭壇の下の魂】

黙示録 6 章 10、11 節「小羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。彼らは大声でこう叫んだ。「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさないのですか。」

ヨハネは天において、祭壇の下の魂が、「いつまで裁きを行わ」ないのですかと叫んでいるのを見ます。彼らは神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された殉教者たちのようです。殉教者たちの魂が叫んでいるということです。まるで、殉教者たちが死後、天の祭壇の下で生きているかのようです。

しかし、黙示録の描写は基本的に象徴であり、すべてを文字通り捕らえる必要はありません。祭壇の下に魂を見たのは、殉教者たちの尊い血が流されたからでしょう。彼らには、当然、「いつまで裁きを行わ」ないのですか。いつまで「わたしたちの血の復讐をなさないのですか」と叫ぶ権利があることでしょう。しかし、主は「なお、しばらく静かに待つように」（黙示録 6 章 11 節）と言われるのです。主は一人でも救われるように忍耐されている姿が、象徴的に描写されているのです。ここにポイントがあります。終わりの時代、私たちも「主よ、いつまで待たなければならぬのですか」と叫びたいようなことがたくさん出てくると思われれます。そのようなときは、「なお、しばらく静かに待つように」と主が語られているのだと理解せよということなのです。